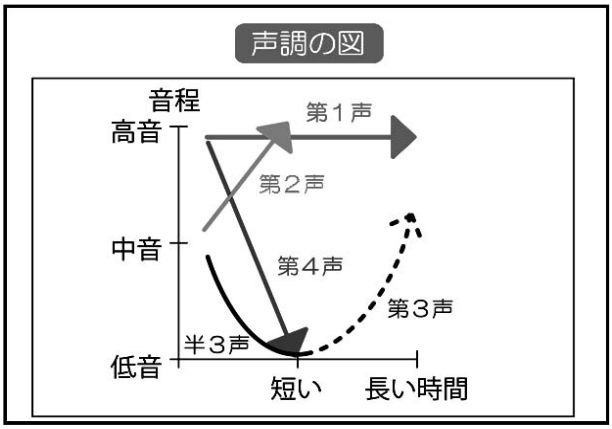
事務局 amateur スタッフによる **フォロー・アップ メモ・ランダム**

“倭人はどんな言葉を話したか” にて

講座の中盤で日本書紀の区分論の話しが出てきて、「マーママーマー」と発音されました。日本書紀や魏志倭人伝は中国語、つまり漢字で書かれているので、漢字の中国語発音の一例として発音されました。漢字で書くと「媽媽罵馬」となり、媽が「お母さん」、罵が「叱る」、馬が「ウマ」で、「お母さんが馬を叱る」と言う意味になるようです。日本人には「媽・罵・馬」の三つは同じ「マ(ma)」としか聞こえませんが、中国の人はこれを聞き分けて、言い分けているわけです。これを中国語の声調、或いは四声と言い、「媽」が第一声、「罵」が第四声、「馬」が第三声になるようです。また、日本では同じくマと読む「麻」が第二声というようです。どう言い分けるかを示したのが、右の声調の図です。



第一声は高い音で平板に、第二声は中ぐらいの高さで始めてさらに高く、第三声は中ぐらいの高さからいったん低く下げ、最後は尻上がりに、そして第四声は高い音から低い音に下げるそうです。表音文字のアルファベットや仮名と違い、表意文字である漢字は一字で意味を表します。植物のアサを「麻」と書き、動物のウマを「馬」と書きますが、その発音が同じ「マ(ma)」では区別できません。発音でも第二声と第三声の声調で言い分けているのです。中国語を正しく話すには、無数にある漢字のそれぞれを、一声から四声のどの声調で発音するかまで覚えなければならないようです。

魏志倭人伝は、中国(晋)で、中国人(陳寿)によって書かれた書物なので、漢文(中国語の文法)で書かれています。まだ文字を持っていなかった倭人でも、互いを認識し合ったり、場所を特定するにも何らかの名前で呼び分けています。それらの情報は、倭人が発している音と同じ音の漢字を当てて記録しているわけですが、漢字も地域や時代によって発音が変化するので、陳寿や倭に派遣された役人が、どの時代のどの地域の発音で会話をしていたかも重要になってきます。

中国語の音がバラエティーに富んでいるのは、先に見た声調ばかりではありません。たとえば、歌、訶、軻、加 の漢字は、日本ではいずれも「カ」と読まれますが、中国では [kα]、[hα]、[k'α]、[kα] と区別されます。質問コーナーで出た邪馬台国の卑弥呼もピミホ であり、‘呼’ の字は ‘コ’ と言うより ‘ホ’ に近いようです。

森先生が提唱された日本書紀区分論は、今や定説となりつつとありますが、数ある論拠のひとつに挙げられるのが、左の喉音系統字の分布です。カ行の音として、喉の中、舌のつけ根で調音される音(＝牙音)の漢字は、日本書紀全巻に亘って分布していますが、「胡」や「虚」のような声帯の間で調音される音(＝喉音)は、分布する巻(β群)とそうでない巻(α群)が明確に別れます。飛鳥・奈良時代の日本人は、記紀や万葉集の分析などから中国語の牙音と喉音を聞き分けられかったようで、カ行は全て牙音で発していたようです。ですから、日本人同士の会話には喉音はなく、地名や人名にも喉音が含まれなかったはずです。従ってそれを忠実に再現したα群の著述者はネイティブの渡来人(＝唐人)で、中途半端なβ群の著述者は中国語を学習途上の日本人と推測されています。

「経済」「人民」「共和」などの明治時代に日本人が造った和製漢語は、現代中国でも多く使われています。それまでの中国になかった西洋の“物”や“概念”に対する言葉を日本からの導入でなく、中国でも独自に創出しようとする試みがありました。日本のように熟語ではなく、表意文字の優位性を活かして**単漢字**で表現しましたが、正確に原意を伝達できる和製漢語の方が受け入れられたようです。

声調など多くの音を使い分けられる中国人でも、増え続ける創出漢字の発音を、既存漢字とどう差別化するかで、とうとうオーバーフローしたのかも知れません。

【表12】喉音h系統字(カ行)の分布

分布する巻	喉音 コ乙 暁母 虚	喉音 コ乙 暁母 許	喉音 コ甲 匣母 胡	喉音 カ 匣母 河	喉音 カ 暁母 訶	牙音 コ乙 六字種	牙音 コ甲 五字種	牙音 カ 十字種	仮名 巻
									一
●					1	3	1	10	二
●	2					4	4	12	三
●		2	1				2	8	五
●	2	3					1	7	七
●	3	2			1		2	10	九
●	3	1			3	1	3	11	一〇
●	19	4	1				7	29	一一
								1	一二
●	3	2			2	4	3	5	一三
						8	7	20	一四
						1		3	一五
						3	4	19	一六
						3	2	10	一七
							2	2	一九
●		2	1	1	6		3	6	二二
●	2							1	二三
						8	2	7	二四
						1	2	6	二五
							4	14	二六
						2	6	3	二七

“日本書紀の謎を解く”より

※ 古代史(弥生時代～飛鳥時代)に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論 大募集 (体裁は自由ですが、文書でお願いします)